

素戔鳴尊の剣（上）——吉備のどこにあった？

とつか つるぎ  
「十握の剣 流転の真実」

NPO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎

<はじめに>

筆者は15年前に医学系大学の学園報に「吉備国残照」のタイトルで、日本書記に伝わる素戔鳴尊の断蛇の剣が吉備の神部のもとにあったという伝承を紹介したことがある。通説として流布されている「岡山県赤磐市石上の布都魂神社に伝わっていたのをある時、大和の石上神宮に移した」というものである。

ところが、倉敷市真備地区の方から「布都斯御魂の剣は、西林国橋（備中神代神楽創始者）家の家伝によれば吉備津神社にあったとなっている」とお聞きした。

吉備津神社に問い合わせると、「平成の大工事・御本殿屋根葺替修理にあたり、これまでに蒐集整理された文書類を新文書集に追加・整理し、改定増補版にまとめ出版されている。それに十握剣のことが載っています」との返事をいただいた。

早速、新しい文書集を開いてみると、驚くべきことが書かれていた。

## 「十握御剣在所ハ 御神体ノ左ノ脇（但シ三重箱二入ル明ル事不可有之）」

要約することもないが「十握の剣の在りどころはご神体の左のわき、ただし三重の箱に入っており開けることはあってはならない」と書いている。これでは布都斯御魂の剣は今も吉備にあることになるではないか。どう考えるべきか？ 大屋根葺替に伴う一時的な御遷宮で「われわれも確認、お姿をお伺いする機会がありました」と関係者の証言まで得られた。

やや、落ち着いて考えると、この剣には、崇神天皇、あるいは仁徳天皇の時に大和へ移されたという2つの異なる伝承がある。その移された大和の石上神宮に収められていることは明治7年の発掘で真実らしいことが確認されている。

そうすると確かに一時期、同神社に収められていた。しかし、大和の石上神宮に移されるにあたって、レプリカを制作したと考えてよいのではなかろうか。

ではどのような経過で、出雲、吉備、大和へ流転したのか、その真実を追ってみた。

## < 1 > 吉備の神部のもとに劍

### ◎日本書紀の記述

日本書紀の卷第一神代の上第八段第三  
の一書あるふみに十握とつかの劍つるぎについて次のよう  
にある。「一書(第三)にいう。素戔鳴尊が、  
奇稲田媛くしいなだひめを妃に欲しいといわれた。脚摩  
乳・手摩乳が答えていうのに、『どうかあ  
の大蛇を殺して、それから召されたらよ  
いでしょう。かの大蛇は頭ごとに、それ  
ぞれ石松が生えており、両脇に山があり、



石上布都魂神社

大変つよいのです。どのようにして殺されましようか』と。素戔鳴尊は計を立て、毒の入  
った酒を用意して飲ませた。大蛇は飲んで眠った。素戔鳴尊はそこで、韓鋤からさびの劍をもつて、  
頭を斬り腹を斬られた。その尾を斬られるときに、劍の刃が少し欠けた。そこで尾を割い  
てみると、一つの劍があった。名づけて草薙劍という。この劍はもと素戔鳴尊のところに  
あり、今は尾張国にある。また、その素戔鳴尊が、蛇を斬られた劍は、いま吉備の神部かんとも  
(神主)のところにある。尊が大蛇を斬られた地は出雲の簸ひの川の上流の山である」(宇治  
谷孟現代語訳「日本書紀 上」p 49、註1に原文あり)という。

たしかに「いま吉備の神部のもとにある」となっている。しかし、現在の石上布都魂いそがみのふつみたま  
神社じんじやは、寛文9年(1669)、岡山藩主・池田光政公が山頂で朽ち傷んでいた本社を再建し、  
次の藩主・綱政公は社領20石を寄進、本殿・拝殿・神楽殿を改築し宝永7年(1710)  
に復興の折紙を奉納している。

延喜式神名帳に、備前国赤坂郡に石上布都之魂神社が見えることからこの地に白矢が立  
ったのだろう。地名の「石上」は、もとは「西上」であったとの指摘もある。

平成31年(2019)には復興350年祭が催されるなど永い歴史を刻み、信仰の対象として  
崇められている。

### ◎「簸の川」の川上は吉備だった？

問題は「劍は、今吉備の神部きび かんとものをの許ところに在り」のあとの「出雲之簸川上山是也」であ  
る。これについて岩波文庫版の校註では松下見林の意見としてこの部分を衍文いずも ひのかわのかみのやまこれなり(間違って  
入った不要の文章)と断じている。すなわち「吉備に出雲の簸ひの川などあるはずがない」  
というものである。おそらくこれが標準的解釈であろうか。

ところが、江戸時代の吉備の地誌「<sup>きびのちり</sup>寸簸乃塵」(吉備の地理という意、著者・土肥経平註2)には、思わぬことが書かれていた。

「<sup>いみべのまさみち</sup>忌部正通は古い日本紀を持っており、その説は正しい。脚摩乳・手摩乳・奇稲田姫はこの石上の人だ。出雲國の川上に降り到ったとあるのを、この説によって、出雲の二字を備前と置かへてみてよく通じる。」(吉備群書集成「寸簸乃塵」p323)と

いうのだ。忌部正通は南北朝期に『日本書紀』神代紀の注釈書を書いている。

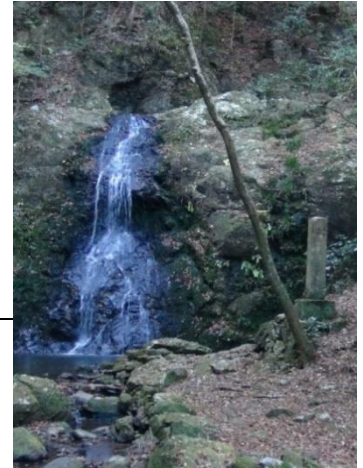
さらにその説に基づき「備前國津高郡上市場村に高祖山がある。この山は御野郡蓑里とも笠目山ともいい、尊が(青草を束ねた)笠蓑を脱ぎ捨てたところだ。巨旦將來に宿を頼むが借れず、兄の蘇民將來に頼むと貧しけれども、

甲斐甲斐しく世話をしてくれた。この地での出来事だ」(同)という。出雲も備後もすべて備前のこととしてしまいたいという雰囲気だ。

石上布都魂神社の北東約12キロには素戔鳴尊が<sup>おろち</sup>大蛇を斬った後剣を洗った「血洗いの滝」(コラム1 吉備神話を参照)もある。大蛇退治を吉備でのことにすると剣がもともと吉備にあり、出雲の簸の川説を否定できる利点があるようだ。

しかし、吉備の江戸時代の国学者らはこの説を支持する傾向が強い。岡山藩の海事方を務め地誌にも詳しかった松本亮(本名・亮之介)の「東備郡村誌 卷之一」にもこの土肥経平の説を受け継ぐ形で「旭川=簸の川説」が記されている。その一部分を要約した赤坂郡誌には「簸の川は備前の西大川即ち旭川のことで、昔吉備國を<sup>きび</sup>寸簸國と書いてみた。其の寸簸の上の一字を略して、簸川と書いたのだろう。又此の川を箕川と書き、古事記に氷川と書いてある。何れもひの川と読んで、旭川をさすのである。此の簸川の源は、伯州日野郡鳩ヶ原で、出雲の簸川(斐伊川)は、伯州境より出で、其の源の<sup>あいへだた</sup>相距る事<sup>こと</sup>数里<sup>また</sup>・亦混同の起り易いのは道理である」(赤磬郡誌p228)とある。

地図を広げてみると、この鳥取県日野郡に鳩ヶ原は現代の地図にはないが岡山県と鳥取



### コラム1 吉備神話

「岡山城のある御野郡の『みの』は、スサノオが天上界から地上に追放された時、大雨の中をミノ姿で落下、地上に雨宿りの場所を探した神話が吉備にあったからだ。旭川(簸川)でオロチ退治をした後、(略)オロチを切った剣を石上神社に奉納、ミノを脱いで奉納した場所を蓑山」。出雲神話の多くの舞台が元は吉備だったというのが吉備神話だ。岸元史明著「岡山古代地名探検 岡山城下 上編」(平成25年刊、p10)は江戸時代の国学者らの著作から「吉備神話」を創作したようだ。

赤磬市の「血洗いの滝」には千家尊愛氏(出雲大社大宮司・二代目)が訪れ「御劔を洗ひましけむ古言のながれも清きたきや此瀧も」の歌碑を残している。

(写真は「血洗いの滝」、歌碑は右)

県境に近い蒜山地区にある。簸川(斐伊川)は船通山に源を発しており、ともに伯耆の国との国境でこのことを言っているのであろうか。「其の源の相距る事数里」とすればやや無理がある。古代のことで「日野郡鳩ヶ原」があったのかもしれないが、船通山に近いところに旭川の源流を求めることは難しい。

## ◎先代旧事本紀も参照

岡山藩士で漢学者、藩儒官を務めていた大沢惟貞(註3)は、「吉備温故秘録」で日本書記だけでなく、先代旧事本紀をも参考に石上布都魂神社について論じている。

「上古素戔鳴尊<sup>おろち</sup>蛇を断の劔は、当社に在事明かなり、其後、崇神天皇の御宇、大和國山邊郡石上村へ移し奉るとあれ共、当社を廢されしとは見へず、又、延喜式神名帳にも、大和國と當國に布都魂神社載せられたるは、當國石上神社を大和國に勧請して、地名も石上といいしならん、さすれば當國の石上本社なる事も分明なり」(吉備群書集成「吉備温故秘録」p416)と明確に素戔鳴尊の断蛇の劔が布都魂神社(磐座近くの小詞を指すか)にあったことを述べている。

さらに「垂仁天皇の御宇、新に劔一千口を作りて、石上神宮に藏<sup>おさ</sup>むとあれば、蛇<sup>おろち</sup>を断の劔も、当社にある事分明なり、され共世変り時移りて、佛法盛に行れ、神道次第に衰へ、石上ふるきむかしの事を知る人もなくなりければ、大守曹源公(池田綱政のこと)深く是をなげき玉<sup>たま</sup>ひ、延宝元癸丑年、廣澤元胤に命じて、社記を作らしめ、当社に奉納し、大松山村之内にて、地高二十石を神領とし、祠官金谷肥後を、旧姓物部に復して、祭事を司らしめ、時日の禮奠をおこたらず、又、其後寛永七庚寅年、寺社奉行門田市郎兵衛貴通、作事奉行村瀬勘九郎俊重に命じて、宮殿を再造有りし已<sup>いらい</sup>来、当社今に繁栄す」(同p416)と同社の復興のいきさつも記している。

また大和の石上神宮へ移した時期については、「崇神の御宇」としている。これまで引用したものもいずれも崇神朝のこととしている。

しかし、劔を受け入れた石上神宮に伝わる「石上神宮旧記」には「素戔鳴尊が、蛇を斬った十握の劔は、名を、天の羽々斬という。また、蛇<sup>おろち</sup>の麿<sup>あらまさ</sup>正という。その神気を、布都斯御魂神<sup>ふつしみたま</sup>という、天の羽々斬<sup>ははぎり</sup>は、神代のむかしより、仁徳天皇の五十六年にいたるまで、吉備の神部のもと(今、備前の国の石上の地<sup>いそのかみ</sup>)にあった。仁徳天皇の五十六年十月二十六日(原文では、十月の一日を、己巳<sup>つちのとみ</sup>と記すが、甲申<sup>きのえさる</sup>の誤りとみられる。誤りを訂正したうえで、干支で己西<sup>つちのととり</sup>と記された日を二十六日に換算した)、物部の首<sup>おびと</sup>市川の臣(布留の連の祖<sup>ママ</sup>)は、勅を奉じて、布都斯魂神社を、石上振神宮の高庭の地に遷し加えた。高

庭の地底の石窟のうちに、天の羽々斬を、布都の御魂の横刀の左の座(東方)に、加えておさめた。これで、布都の御魂の横刀は、中央になった。その神器の上に、霊まつりの庭(霊時)をもうけ、あわせて、布都斯魂神をまつり、加えてまつる神とした。」(以上、原文は漢文)(安本美典著「邪馬台国と出雲神話」p211~212)

このように詳しく記されており、石上神宮旧記の情報は信頼できそうだ。しかし、地元での伝承はすべてが崇神朝だ。それはそれなりの根拠を持っていると考えざるを得ない。

### ◎福山の山野説

これまで素戔鳴尊の剣の伝承は現在の赤磐市石上の石上布都魂神社ばかりが注目されて来た。ところが備後にも伝承があることがわかった。その伝承地は福山市山野にある多<sup>た</sup>祈<sup>け</sup>伊<sup>い</sup>奈<sup>な</sup>太<sup>た</sup>伎<sup>き</sup>佐<sup>さ</sup>耶<sup>や</sup>布<sup>ふ</sup>都<sup>つ</sup>神社である。

巨大な石灰岩の塊に横広の鍾乳洞窟がある。見上げるその岩屋は神秘的に満ちていた。その大きな石灰岩の洞穴内の社殿は左右二社になっている。向かって左が布都御魂の剣の伝承を持つ赤浜宮となっている。

広島県神社誌などによれば、延喜式内の古社であったが所伝を失い、明治元年に式内社であることが確認された。伝承では祀られているのは3つある。

- ① 日本武尊が穴ノ海の海賊をこの地に追い詰め平定された時の尊の剣
- ② 素戔鳴尊が大蛇を退治された時の剣
- ③ 吉備の下道の祖・稲速<sup>いねはや</sup>別の命

①と②は広島県神社誌、③は境内看板を参照した。

これはいくつかの神社が合祀されたためであろう。

地元の伝承などをまとめた世良戸城編著「山野村語伝記」(註4)によれば「当神社名



巨大な石灰岩(上)の崖下にある洞穴に祀られている「多祈伊奈太伎佐耶布都神社」=福山市山野

を各語に分解すれば「多<sup>たけ</sup>禰」は美称的、敬称的の語、「伊<sup>いな</sup>奈<sup>だ</sup>太は稲田で、氏族名、「伎<sup>き</sup>佐<sup>さ</sup>耶」は木鞘、「布<sup>ふ</sup>都」は剣であり、要約すれば稲田氏の剣と云うことになる。稲田氏は出雲氏族であって古代備後の砂鉄を追って来た鍛人氏族で、山野村を根拠に小田川流域や穴海沿岸に進出繁茂し、その祖神稲田宿禰命を祭ったものが赤浜宮である」とする。

大日本史に「(この神社は)今山野村原谷にある。本社は奇稲田姫命の祠かとも思う。素戔鳴尊を祀る。延喜式には山城に健伊那太比売社、能登には久志伊奈太伎比峰社があり、それぞれ奇稲田姫命にゆかりがあり、多禰伊奈太伎という名称は似ている。佐耶布都とは、よく切れる剣のことをいい、素戔鳴尊が持っていた十握剣のことで、蛇を斬って宝剣を獲たゆえである。また剣の神の呼称でもある」(「山野村語伝記」 p 198、原文漢文。現代語訳)

この説は地元にかかわりがある旧海軍大佐の猪原薫一氏が昭和 19 年に著した「多<sup>たけ</sup>禰<sup>いな</sup>太<sup>だ</sup>伎<sup>き</sup>佐<sup>さ</sup>耶<sup>や</sup>布<sup>ふ</sup>都<sup>つ</sup>神社考」(註 5) の考察を受け継いでいる。

広島県神社誌で指摘があった「(伎)佐耶布都は剣の名と言われ、大和国の石上神宮に祀る佐土布都神は神武東征の時の剣の霊であり、当神社と類似性がある」(同神社誌 p 919) の指摘もあり、再考の余地があるかもしれない。佐土布都神の正式名は布都御魂であり、布都斯御魂とは「斯」「御」の二字の違いで混同は起こりうる。いずれの説をとるにしろ、伝承に思い込みや混乱はある。出雲との近さ、吉備のエリアであり、今後も検討は必要だ。

## ◎岡山市・撫川に 関連の伝承

大吉備津彦命の御陵がある吉備の中山の南西 2 キロばかりのところに建つ小さなお社が少し離れて 2 つ並ぶ。その神社は「須佐之男神社」と「撫川八幡神社」で、同じ氏子が祀っている。須佐之男神社の由緒書きによれば「往昔、吉備中山に大吉備津彦命鎮座後、十握剣を宝物として彼の社に納めた。寛喜年中(1229～32)に彼の社が回祿(火事の事)の際、御剣を此の地に遷して



吉備津神社にほど近い鎮守の杜・須佐之男神社の伝承は正しい歴史を伝えていた＝岡山市撫川

奉斎した。御剣は彼の社に奉遷後、御剣の縁に依って須佐之男命・天照大御神を跡地に祭った」とある。

この由緒書きには「寛喜年中に彼の神社で火事があった」となっている。彼の神社とは文脈、地理的な近さから、吉備津神社しかありえない。同神社では「寛喜」年中は火事はなかったなど誤りもあって、「路傍の文化財第 1 編神社の石碑—吉備・陵南にある石碑を訪ねて—」(2010 年、戸川・板倉時代研究会刊 p43) には「彼の神社は吉備津神社で、同神社で火事があったのは康平 4 (1061) 年 11 月とある。吉備津神社の年表にも同年 1 1 月 2 5 日に本社が炎上したとある。その後、再建が成ったのでお移した」という

これが事実なら崇神か、仁徳朝期に大和に遷された「十握の剣」が、まだ吉備にあったことになる。不思議である。

崇神朝で三種の神器うち鏡と剣を<sup>かさぬいのむら</sup>笠縫邑に安置し<sup>とよすきいりひめのみこと</sup>豊鍬入姫命に祀らせた時、「古語拾遺」には次のようである。

<sup>いんべ</sup>「齋部氏をして<sup>いしこりどめのがみ</sup>石凝姥神が<sup>あめのまひとつかみ</sup>裔・天目一箇神が裔の二氏を率て、更に鏡を鑄、剣を造らしめて、護りの御璽と為す。是、今踐祚す日に、献る神璽の鏡・剣なり」(岩波文庫版 p 38) とある。当時からレプリカを作るという伝統があったようだ。吉備でも「十握の剣」の模倣刀が作られていたのだろう。



「布留社」の禁足地と示された剣形の瑞垣



禁足地の配置図。一辺が120坪の方形に盛り上がっている。古墳の再利用説もあるが、はっきりしない

## < 2 > 禁足地を掘った男

### ◎<sup>おろちたいじ</sup>大蛇退治は史実か

素戔鳴尊の大蛇退治はどこから見てもファンタジーであろう。だ

が、この記紀のファンタジーには史実の核があると思う。その男もそうだったのだろうか。いや、もっと確信に満ちていたに違いない。

その男は菅政友（註6）。奈良県天理市の石上神宮の大宮司だった。同神宮には「八岐の大蛇を退治した素戔鳴尊の十握の剣を、石上神宮に祀った」という古くからの伝承があった。何人も絶対に足を踏み入れてはならない神聖な場所・禁足地にはいり発掘した。

「彼は土のなかを発掘した。その結果、棗玉、勾玉、鉄製の鏃など三百数十点にも達する古代の宝物が次々に発見されたのである。そしてその中に一本のぼろぼろに錆びた鉄剣があった。全長二尺八寸、約九十二センチ、刃の方に反った内反りの大刀で、柄頭の飾りが何もない素環刀大刀であった。剣はただちに本殿に安置され、以来石上神宮のご神体として祀られている。なぜ御神体として祀られたのか。つまり、八岐の大蛇を斬ったスサノオの十握の剣の伝承と発見された鉄剣がピッタリ一致したのである」（歴史への招待 12 推理・草薙剣」NHK 編 p 181）

これは何を意味したのか？ この刀は大蛇の尻尾にあった草薙剣とぶつかって、刃こぼれを起こした、その証拠であると確信した。出雲の簸の川の川上で大蛇を退治し、吉備の地で神部に守られ、大和のこの地で眠り続けた「布都斯御魂の剣」なのだと。

刃の欠けまでとはと驚きでにわかには信じがたいが、伝承には重みがある。

## ◎盗掘被害避けるため

和田萃氏編の「大神と石上 神体山と禁足地」（註7）によると、彼はこの発掘は教部省に届け出て許可を受けていた。出身の水戸で「大日本史」年表の編纂にも携わり、水戸学の研究態度も受け継いでいたことと、それにこの禁足での盗掘被害が起きていたので禁足地の発掘という思い切った行動に走ったようだ。したがって、剣が出土するや否や直ちに神庫（当時は本殿はなく、できるまでの仮安置）に収めた。

## ◎形造剣は三振り

こうして布都斯御魂の剣は地中から神官たちのいる建物におさまったが、依然神秘の世界にある。菅政友大宮司は明治天皇にお見せした。人間国宝で帝室技芸員の初代月山貞一に形造刀3振り造らせ、皇室と石上神宮に収めた。その後、奇妙な方の寄贈で赤磐市の石上布都魂神社に安置された。

剣の形は次号「素戔鳴尊の剣<下>——どんな形だったか？」で検討する。



## コラム2 石上神宮の主祭三神について

ここで、似たような刀の名や、神名がでてきて、ややこしい。すこし、整理しておこう。石上神宮の現在の主祭神は、つぎの三神である。

(1) **布都御魂神**……佐土布都の神、甕布都の神、平国の劍、訶靈とも記す。建御雷の神が、大国主の神に、国譲りをせまったときに帯びていた靈劍である。神武天皇が東征のさい、熊野の高倉下を介して、神武天皇にさづけられた。熊野平定のさいに靈威を示した。『旧事本紀』によれば、神武天皇は、即位後、物部氏の遠祖の宇摩志麻治の尊に、その神劍を奉祀させた。社伝によれば、崇神天皇の七年に物部の連の祖の伊香色雄の命が、勅を奉じて、宮中から、石上の高庭にうつしたという。なお、「布都」「訶」は、「プツ」と物を断ちきる音を写したものとみられる。

(2) **布留御魂神**……饒速日の尊は、高天の原から降臨のさいに、十種の瑞宝を、天神の祖から与えられた。十種の瑞宝とは、羸都鏡・邊津鏡・八握劍・生玉・足玉・死返玉・道反玉・蛇の比札・蜂の比札・品物比札である。饒速日の尊の子の宇摩志麻治の尊は、その十種の瑞宝を、天皇に献った。社伝では、その十種の瑞宝の神気をたたえて、布留御魂神という。社伝では、この布留御魂神も、崇神天皇の七年に、物部の祖の、伊香色雄の命が、石上の高庭に移してしまったという。なお、「先代旧事本紀」によれば、饒速日の尊が天降るさい、天神の祖は、つぎのような言葉とともに、十種の瑞宝を与えたという。「もし、痛むところがあれば、この十種の宝を、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十といつて布留え（ふるわせよ）。ゆらゆらと布留え。こうすれば、死んだ人は、生きかえるであろう。これは布留の言葉のもとである。」十種の瑞宝の神気を、布留御魂神というのは、呪文の布留の言葉と関係があるようである。

(3) **布都斯御魂神**……天の羽羽斬の劍、蛇の麿正、天の蠅斬の劍、蛇の韓鋤の劍ともいう。素戔鳴の尊、八岐の大蛇を斬った十握の劍のことである。このように、石上神宮の主祭三神の名前は、きわめてよく似ているが、由来は、かなり異なる。

なお、さきの『石上神宮旧記』の、文のなかの、「布留の御魂は、横刀の鋒を天にむけ、つか頭を、地に植えている」は「布留の御魂」ではなく、「布都の御魂」の誤りとみられる。「布留の御魂」にふくまれる劍は、「十握の劍」ではな、「八握の劍」である。

(安本美典著「邪馬台国と出雲神話」 p 211～212)

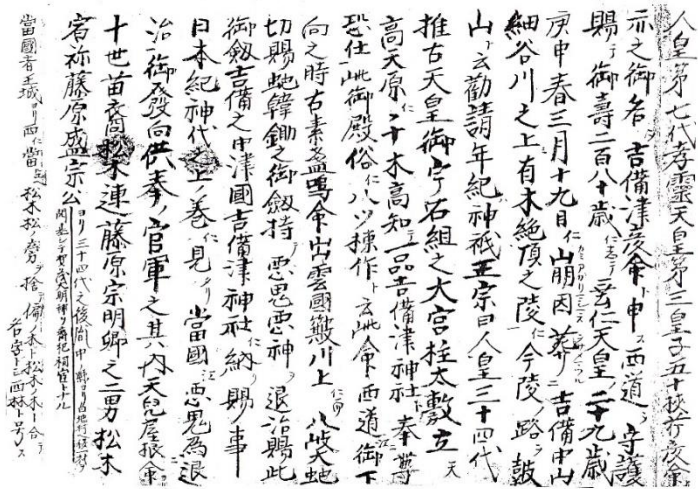
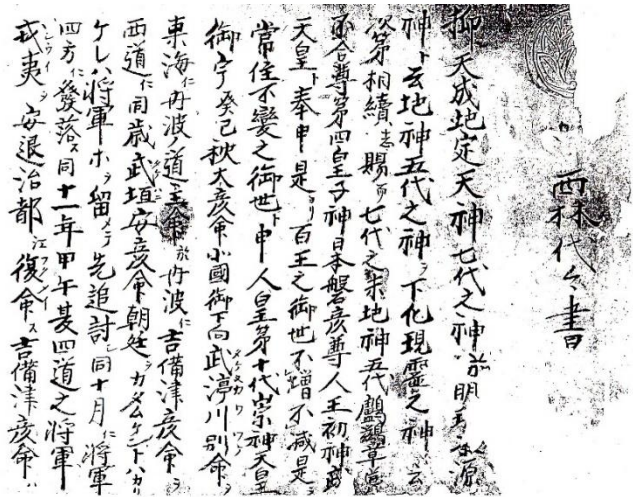
### < 3 > 新資料・西林国橋家の代々書

今回の執筆のきっかけは「はじめに」に書いたように新資料を倉敷市真備地区の旧家・土師家の方からお見せいただいたことによる。4年前の水害で貴重な資料が水没、未だに復元しきれず苦労されており、預かっていた奥様の実家・西林家の資料も同様に、貴重なものは公開することが大切だと思われたようだ。その資料には記紀に書いていない情報は、確かにあった。まず、関連部分を現代語訳で紹介してみよう。

#### ◎天児屋根の子孫

「吉備津彦命は人皇第七代孝霊天皇の第三皇子である五十狭芹彦命、またの名前は吉備津彦命と申し、西の道（山陽地方）をお守りくださって、御寿二百八十歳にして、垂仁天皇の二十九年庚申春三月十九日にお亡くなり、吉備の中山細谷川の有木の頂上の陵に葬った。今、陵の道を鼓山という。勸請年紀は神祇政宗というひとは『人皇三十四代推古天皇の御代に大きな岩を組み敷いた上に大宮柱と千木を天の高天原に届くほどに高く建て、一品吉備津神社』という。この御殿は俗に八ツ棟作りという。この命が西の道に御下向された時よりさらに古の時、素戔鳴尊が、出雲の簸の川の川上で八岐蛇を斬った韓鋤の御剣で悪鬼悪神を退治された。この剣は吉備の中津国（後の備中）の吉備津神社にお納め

になったことは日本紀（日本書紀のこと）の神代之上ノ巻に載っている。当国へ鬼退治のため来られた官軍の中に天児屋根命の十世子孫である松木藤原の宿祢・盛宗公より三十四代の後胤中ノ縣より白地村へ一村を開基して賀茂大明神



**西林家の代々書** 系図一覧の前書き。天成り地定まりてから始まり、四道將軍の活躍ぶり、吉備津彦命の崩御や素戔鳴尊の劍のことを述べている。この後、備中での初代から近代までの系図が続く。

を齋<sup>いっき</sup>祀り祠官となる。当国は都より西に当たるゆえに松木の<sup>つくり</sup>旁を捨て偏<sup>へん</sup>の木と松木の木を合わせて名字とし、西林と号す」（1枚目の最後の行吉備津彦命から現代語訳した。）（註8）

## ◎記紀にない情報

今回の新資料で記紀にないものを拾い上げてみよう。

- ① 大吉備津彦の命は、垂仁天皇29年庚申春3月19日に亡くなっている。
- ② 御歳280歳だった。
- ③ 吉備の中山の有木の頂に陵を作って葬った。
- ④ 推古天皇の御代に大宮柱と千木を高くした一品吉備津神社ができた。
- ⑤ 命が下向されるより古く、素戔鳴尊の剣を吉備津神社にお納めになったことは日本紀（日本書紀のこと）の神代之上ノ巻に載っている。

以上5点であろう。

岡山大教授で同神社の宮司家の出身の藤井駿著の「吉備津神社」（岡山文庫）では「吉備津神社の伝えによると、「吉備の中山」の麓に「茅葺宮」を作ってこれに住み、吉備国の統治にあたったが、二百八十一歳の長寿を保って、ついにこの茅葺宮に薨じ、御墓は『吉備中山』のいただきの茶臼山（海拔一六〇メートル）に葬られた」（同書p18～19）となっており、年齢は1歳違っている。一致している点もいくつかある。②の没年は極めて詳細に記録されているが、日本書記の年紀は延長があり不明としか言いようがない。この点はこの項の最後でメモにした。

- ④の「推古天皇の御代に創建」は吉備津彦神社との混同が含まれるようだ。

問題は⑤の「素戔鳴尊の剣を吉備津神社にお納めになったことは日本紀の神代之上ノ巻に載っている」である。これはどこにもない記述だが、日本書記は「剣は、いま吉備の<sup>かんとも</sup>神部のところにある」と記すだけだ。「神部」を神祇官の役職ととるか、神主などに広げるかで変わってくる、神祇官の役職なら「神部」は全国で30人の定員がある世襲職で、吉備では吉備津神社にしかいなかったかもしれない。

元岡山市教委の埋蔵文化財行政に携わってきた出宮徳尚氏は「吉備の<sup>かんとも</sup>神部といえば、当時の吉備にはあまりおらず、吉備津神社しかありえない。また邑久郡に磯上地区があり、物部系でこちらにも可能性がないとは言えない」と話す。

メモ 垂仁天皇29年庚申春3月19日は書記の年紀をそのまま計算すれば、西暦BC1年に当たり、皇紀では660年となる。これはあり得ない。そこで安本美典氏の年代表

を使ってみた。

大吉備津彦命は武埴安彦命の乱（崇神天皇 10 年）、で活躍して、翌年吉備入りを果たしている。この時壮年期の 35 歳とし、当時の最大余命寿命を 60 歳と仮定した場合、崇神天皇 11 年を推定表から算出すれば 344~347 となる。これから 60 歳になるまでの 25 年間を生きたとすれば推定表から 369~372 年となり、かろうじて垂仁天皇の末年 370 年前後となる。

350	340	330	320	310	300	290	280	
(10) 崇神	(9) 開化	(8) 孝元	(7) 孝靈	(6) 孝安	(5) 孝昭	(4) 懿德	(3) 安寧	
(2) 綏靖	(1) 神武							
430	420	410	400	390	380	370	360	
(16) 仁德	(15) 応神	(14) 神功皇后・仲哀	(13) 成務	(12) 景行	(11) 垂仁			
520	510	500	490	480	470	460	450	440
体	(25) 武烈 (498)	(24) 仁賢 (488)	(23) 顯宗	(22) 清寧	(21) 雄略	(20) 安寧	(19) 允恭	(18) 反禮 (485) (480) 正中

垂仁朝まで生きていたという情報は正しい可能性はある。ただこの推定は 35 歳が壮年で、60 歳が最長余命寿命の前提である。古代の余命寿命の統計的データの取得は現段階では難しい。

#### < 4 > 吉備津神社に伝わる秘伝

吉備津神社に伝わっていた文書を見てみよう。書籍名は「改定増補備中吉備津神社文書中世編」編者は藤井学氏。その書の「付録一 吉備津宮祭祀故実秘伝書」のうちに含まれる「(3) 上番預案主所賀陽民部直令筆神膳進退作法等秘伝書」のなかの項目の一つで、次の左のように活字化され読みやすくなっている。読み下し文にしておく。

#### 一、十握御剣在所ハ

御神体ノ左ノ脇（但シ三重箱ニ入ル  
あくることこれ ある べからず  
 明ル事不レ可レ有レ之）

右次第者上番・中番・下番之外一言モ他言  
およびたけんあるまじきものなり  
 及他見有間敷者也、三家之内作法不レ存者有  
あれば たがいでんじゅこれあるべきなり  
 之者、互ニ伝受可レ有レ之也、三家伝来之故  
じつ しんび しゃやく しんたい はじめたてまつるないじん たごん  
 実、深秘之社役、神体ヲ奉 始 内陳之事他言  
あるべからざるものなり せいきょうせい こうけいはく  
 不可有者也、誠恐誠惶敬白、

上番預案主所 賀陽民部直令

享保八癸卯九月吉日 謹書

下番預

賀陽松之助隆処殿

一、十握御剣在所ハ  
 御神体ノ左ノ脇（但シ三重箱ニ入ル  
あくることこれ ある べからず  
 明ル事不レ可レ有レ之）

右次第者上番・中番・下番之外一言モ他言及他見有間敷者也、三家之内作法不レ存者有之者、互ニ伝受可レ有レ之也、三家伝来之故実、深秘之社役、神体ヲ奉 始 内陳之事他言不可有者也、誠恐誠惶敬白、

上番預案主所 賀陽民部直令  
 享保八癸卯九月吉日 謹書  
 (朱印、印文読メズ)

下番預 賀陽松之助隆処殿  
 (別ノ朱印、印文読メズ)

## ◎剣が箱に入っていた

この書籍は〈はじめに〉にも書いたように吉備津神社の平成の大工事・御本殿屋根葺替修理にあたり、これまでに蒐集整理されたものを文書集に追加・整理し、改定増補版にまとめたもので、あまり存在を知られていない。

本殿の屋根葺き替え工事では、本殿のものも一時的にお移したそうで、一部の神官の方が実際に文書通りに「ご神体の左の脇」にあることを確認している。「箱は三重ではなく一つであった」と述べられている。お姿は「信仰上の問題もあり控えさせていただきます」とのことであった。

驚くべきことである。先にも述べたようにレプリカと考えるべきだろう。

## < 5 > 繋がった 3 つの伝承

いよいよ、これらの伝承をまとめる時が来た。吉備の地に素戔鳴尊の剣があった。これはかなりの確度で信頼できると思う。やはり素戔鳴尊は出雲にいたとするのがいいだろう。ではなぜ、どうやって運んだのか？ まだ謎だらけだ。

### ◎新たな発見

- ① 吉備津神社にはレプリカかもしれないが、崇神天皇か、仁徳天皇の時以降もそして今も「十握の剣」がある。
- ② その剣を康平 4 (1061) 年に吉備津神社から預かり、のちに返した神社がある。
- ③ 新たに公開した西林国橋家の代々書では「吉備津神社にあった」と明記している。

### ◎これまでに知られていたこと

- ① 日本書紀に吉備の神部のもとに素戔鳴尊が大蛇を斬った時の剣があると書いてある。
- ② 吉備には赤坂郡に石上布都魂神社という式内社があった。
- ③ 大和にある石上神宮に伝わる「石上神宮旧記」には「仁徳天皇の時吉備から移した」という。
- ④ 吉備の伝承ではいずれも「崇神天皇の時吉備から移した」となっている。

これらから一つの仮説をまとめると次のようになる。

出雲で大蛇（出雲と対立する部族か）を退治した素戔鳴尊は、後継者の大国主命か脚<sup>あしなづち</sup>摩乳、手<sup>てなづち</sup>摩乳かの一族の誰かに剣を渡した。しかし何らかの理由で吉備へ持ち込んだ。

崇神天皇の時、四道将軍の一人として吉備に入った大吉備津彦命や稚武彦命らは布都斯御魂剣が吉備（備前の赤磐郡が可能性が高い）にあることを知り、自分たちが預かることにした。その後、仁徳天皇が黒媛を慕って吉備に来られ、剣は吉備より大和でお祀りした方がよいということになり、レプリカをいつの時代かあるいは移転時に作り、大和の石上神宮へ移した。その後はレプリカを祀った。それは吉備津神社文集秘伝書の通り秘中の秘であった。火事で一時近くに小祠を作って守ったが、吉備津神社が復興してもとにおさめた。それを記念して剣のあった場所に2つの小さな神社ができた。

あくまで仮説だが、3つの伝承は繋がった。

## <おわりに>

3つの新事実を取り込むと上記の仮説になった。見事な一致だが、赤坂郡のどこか、なぜ吉備に持ち込んだかは依然謎だ。

しかし、小さな伝承が集まり「十握の剣」の流転経路の一部が確実にになったことは伝承の力を思い知らされた。思いがけない成果だ。われわれにとっては剣の真実へ一歩近づいたことは間違いない。

なぜなら素戔鳴尊の存在など信じる人はいない中、神話の神が使った剣が移動している。神話の神・素戔鳴尊は存在したのだ。 (了)

## <注釈一覧>

### (註1) 日本書紀「<sup>あるふみ</sup>卷第一神代の上第八段第三の一書」原文

「一書に日はく、素戔鳴尊、奇稲田媛を幸さむとして乞ひたまふ。脚摩乳・手摩乳、対へて曰さく、『請ふ、先づ彼の蛇を殺りたまひて、然して後に幸さば宜けむ。彼の大蛇、頭毎に各石松有り。両の脇に山有り。甚だ可畏し。将に何以してか殺りたまはむ』とまうす。素戔鳴尊、乃ち計ひて、毒酒を醸みて飲ましむ。蛇酔ひて睡る。素戔鳴尊、乃ち蛇の韓鋤の剣を以て、頭を斬り腹を斬る。其の尾を斬りたまふ時に、剣の刃、少しき欠けたり。故、尾を裂きて看せば、即ち別に一の剣有り。名づけて草薙剣と為ふ。此の剣は昔素戔鳴尊の許に在り。其の素戔鳴尊の、蛇を斬りたまへる剣は、今吉備の神部の許に在り。出雲の簸の川上の山是なり。』(岩波文庫黄41 = p 98)

### (註2) 土肥経平

土肥家は岡山藩池田家で有力家臣家。経平は58歳の時謹慎処分を受け、家督を譲り、

76歳で没するまでの18年間、著作に専念。『備前軍記』のほか『鎧直垂考』『備前名所記』『寸箴乃塵』などの歴史・地誌、和歌まで数十冊に及ぶ。「鎌倉殿の13人」にも登場した土肥實平の後裔とされる。

### (註3) <sup>おおさわこれさだ</sup>大沢惟貞

江戸後期の漢学者。岡山藩儒官。貞雄の長子。通称は市太夫。父のあとを継ぎ待講兼国学の教授となる。詩文を能くし、「吉備温故秘録」百余巻を編述した。文化元年(1804)歿、65才。

### (註4)「山野村語伝記」

昭和49年6月刊行。地元の有志でつくった刊行会発刊で、編著者は世良戸城となっている。旧山野村の語り継がれた伝説等をまとめている。

### (註5) <sup>たけい なたき さやふつ</sup>「多祁伊奈太伎佐耶布都神社考」

昭和19年刊7月刊、大阪在住の猪原薫一著「山野村語伝記」によれば元海軍大佐で、地元出身のようである。比較的厳密な考証であるが、自ら述べるように決定的証拠はないとする。

### (註6) <sup>かんまさすけ</sup>菅政友

水戸藩士、医師、歴史家。文政7(1824)年生まれ。藤田東湖らの門人、水戸藩の藩校彰考館主事などを経て、明治2年(1869)栗田寛、津田信存とともに『大日本史』の編纂に携わる。明治6年(1873年)には石上神宮大宮司となり、古伝にいう神地から七枝刀や古玉を発掘して考古学に貢献した。考証史学に寄与した。明治30年(1897年)没、74歳。(wikipediaから)

### (註7) <sup>おおみわ いそのかみ</sup>「大神と石上 神体山と禁足地」(和田萃／編 1988年刊)

同書の「禁足地の成立」の項を担当した置田雅昭氏はかつて天理参考館に勤務しており、禁足地の状況に詳しい。菅政友の発掘の様子などを次のように記している。

「30センチ掘ると瓦が敷き詰めてあった。これを取り除いて下を掘ると石囲いがあった。地表下90センチの所に剣、勾玉、管玉などを発見した。側壁は『一尺或いは尺余の石を積み重ね』とあるから、二段以上積んだ石室のようなものだろう。石室の壁が板石を積んだものか、円礫であったのかはわからない。所伝はないが、発掘地の標柱が石室材の転用とすれば、花崗岩の円礫である。

石室の構造、遺物の構成などが、古墳時代の竪穴式石室、横穴式石室と共通する部分がある。花崗岩を用いた竪穴系の特異な構造を推測させる」

### (註8) 西林家の代々書＝読み下し(12行目から系図前まで)

「人皇第七代孝靈天皇第三皇子五十狹芹彦命、亦御名ヲ吉備津彦命ト申ス西道ヲ守護賜テ御寿二百八十歳仁志テ垂仁天皇ノ二十九歳庚申春三月十九日仁崩因葬ニ、吉備中山細谷川之有木絶頂之陵仁一、今陵ノ路ヲ鼓山ト伝。勸請年紀ハ神祇政宗曰人皇三十四代推古天皇御宇石組之大宮柱太敷立天高天原仁千木高知テ一品吉備津神社ト奉尊恐仕、此御殿俗仁八ツ棟作ト云。此命西道江御下向之時古素戔鳴尊出雲国簸川上仁而八岐蛇切賜韓鋤之御劍持テ悪鬼悪神ヲ退治賜。此御劔吉備之中津国吉備津神社仁納リ賜事日本紀神代之上ノ卷仁見タリ当国江悪鬼退治御発向供奉ノ官軍之其内天児屋根命十世苗裔松木連・藤原宗明卿之二男松木宿祢藤原盛宗公ヨリ三十四代之後胤中ノ縣ヨリ白地村へ不明文字□一村ヲ開基シテ賀茂大明神ヲ齋祀祠官トナル。当国者王城ヨリ西仁当タルユへ松木松ノつくり旁へんヲ捨テ偏ノ木ト松木ノ木一合テ名字トシ、西林ト号ス」(句読点は入れた部分もある)

## 著者プロフィール：石合 六郎 (いしあい・ろくろう)



昭和 20 年 4 月、岡山県倉敷市児島田の口に生まれる。児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年卒。同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と知り合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。